



日曜の会が30周年記念講演・シンポジウムを開催

町田のまちづくりとともに30年、今後の景観まちづくりにもたゆまず提言

5月17日(日)、鶴川駅から程近い可喜庵(鈴木工務店内)にて、町田市における老舗の市民団体のひとつとして知られる日曜の会の設立30周年を記念した講演とシンポジウムがひらかれ、会員・会友をはじめとして40人以上にのぼる多数の市民、行政関係者が参加しました。当市民会議の会員であり日曜の会の会友でもある大橋成夫氏がコーディネーターのひとりとして、開会と閉会に際して挨拶をおこないました(日曜の会のこれまでの簡単な歩みについては今号の大橋会員による関連寄稿をご覧ください)。



環境色彩を考える——自然は色を上手にコントロール
まず武蔵野美術大学客員教授である吉田慎悟氏を講師に迎えて、「環境と色彩」と題した記念講演がおこなわれました。吉田氏はネパールやフランスの美しい風景、あるいはまた日本の小田原や秦野のまちなみの事例をパワーポイントで紹介しつつ、それぞれの地域にはその地域の色があること、そしてその地域で産出された素材から自ずとにじみ出てくる質感を、まちの色彩として大切にする必要を強調しました。吉田氏によれば、良いまちというのはある一定の色域に収まるものであり、その色域は一見して狭いものの、実はその狭さのなかにある多様性は実に幅広いということでした。実際に吉田氏が各地で採取した土の見本の一覧が紹介されましたが、赤に青に黒にと、まるで色とりどりのパステルのようなその多様で美しい色彩のバリエーションに、会場からは驚きのため息が聞かれました。それにたいして、オレンジやピンクのけばけばしい建物がしばしば場違いに建てられてしまう日本の現状を踏まえ、イメージのなかで色を操作してしまうことの危険性を吉田氏は指摘しました。そのうえで色彩ワークショップの開催事例を紹介しつつ、色表をもってまちのなかに出かけていき、現場で実際に良いと思った色を数値などでもって確認してみることの大切さを吉田氏は挙げました(なお、質疑応答のなかで、同じ色でも環境のなかでまったく異なって見えることもあり、数値化に完全には頼りきることのできない色彩の繊細さにも吉田氏は触れました)。

環境色彩を考える——自然は色を上手にコントロール

まず武蔵野美術大学客員教授である吉田慎悟氏を講師に迎えて、「環境と色彩」と題した記念講演がおこなわれました。吉田氏はネパールやフランスの美しい風景、あるいはまた日本の小田原や秦野のまちなみの

事例をパワーポイントで紹介しつつ、それぞれの地域にはその地域の色があること、そしてその地域で産出された素材から自ずとにじみ出てくる質感を、まちの色彩として大切にする必要を強調しました。吉田氏によれば、良いまちというのはある一定の色域に収まるものであり、その色域は一見して狭いものの、実はその狭さのなかにある多様性は実に幅広いということでした。実際に吉田氏が各地で採取した土の見本の一覧が紹介されましたが、赤に青に黒にと、まるで色とりどりのパステルのようなその多様で美しい色彩のバリエーションに、会場からは驚きのため息が聞かれました。それにたいして、オレンジやピンクのけばけばしい建物がしばしば場違いに建てられてしまう日本の現状を踏まえ、イメージのなかで色を操作してしまうことの危険性を吉田氏は指摘しました。そのうえで色彩ワークショップの開催事例を紹介しつつ、色表をもってまちのなかに出かけていき、現場で実際に良いと思った色を数値などでもって確認してみることの大切さを吉田氏は挙げました(なお、質疑応答のなかで、同じ色でも環境のなかでまったく異なって見えることもあり、数値化に完全には頼りきることのできない色彩の繊細さにも吉田氏は触れました)。

原町田、小野路、玉川学園での取り組みを通じたミニ・シンポ

講演に引き続き、「各地域での取り組みを通し、今後の景観まちづくりを考える」と題したシンポジウムがおこなわれました。原町田文学館通りについて大戸徹氏(大戸まちづくり研究所)が、小野路宿通りについて神谷博氏(設計計画水系デザイン研究室)が、そして玉川学園地区について木村真理子氏(木村建築研究室)が、それぞれの地域で過去5年前後にわたって続けられてきたまちづくりの取り組みについて、とくに景観の観点を重視して報告をおこない、それら報告を踏まえて参加者との意見交換がおこなわれました。会場からは、市内の多様なまちづくりの団体とも連携して横断的ネットワークを強化する必要も提案され、各地域の課題や成果を全市的にどう共有するかが今後の課題として浮き彫りになりました。

第70号目次

日曜の会が30周年の記念講演・シンポを開催	1
ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(五)	渋谷 謙三 2
町田を歩き、考えて「日曜の会」は30年を迎えました	大橋 成夫 5
景観条例および景観計画策定に伴う市民参加の経緯と市民のおもい	清瀬 壮一 6
事務局だより・編集後記	8

渋谷 謙三

1966年(昭和41年)の5月、全国初の青少年健全都市を宣言した町田市は、その年の12月に役所の大幅な組織改革を行なった。この改革の煽りを受け、私は僅か1年半余りで民生部の福祉事務所青少年係を離れ、新設された企画部企画課の初代企画係長を命じられることになった。ちなみに、私の上司になる初代の企画部長は友井正男氏(前民生部長で青少年健全育成都市宣言の事務局責任者)、初代企画課長は坂本八郎氏(前衛生課長で現市坂本財務部長の父君)で、このお二人は、以後私が役所を依願退職するまで何くれとなく面倒をみていただいた方である。

私は、この異動が半年程前の5月5日の青少年健全育成都市宣言式典とそれに続く8日の「母と子の集い」の大きな催しを連続で無事成功させ、さてこれからが本番だと自らも言い聞かせて、市内の子どもたちの健全育成事業の本格化に取り掛かり始めた矢先のことだったから、大変な抜擢人事だとはわかっている、当初は突如我が身に降りかかった交通事故のような人工的な災難に等しいもので、将に人間のやる気を失わせる見本のような人事だと本気で思ったりもした。当時の私は、町田市役所に就職して8年が過ぎ、二人の娘の父親になったばかりの33歳の、ようやく一通りの事務処理は大過なくこなせるようになってはいたものの、まだまだ血気盛んな半端者で、誰が見ても小生意気な若僧役人だったのだ。

■新しい企画課の仕事は、農村から都市行政への体制づくり

とは言え、新しい企画課の仕事は、これまで教育畑しか知らなかった私には大変に面白く、またやり甲斐のある魅力にあふれた仕事ばかりが連続して待ち構えていた。

坂本企画課長と私は、時間がありさえすれば、企画課は当面何をするべきか、将来に向けては何を準備すべきかなど、町田市の現状と将来の問題点や課題について整理することから考えようと、まさに「口角泡を飛ばして」真剣に話し合った。

私たちは置かれた状況の分析を試みた。『市制が敷かれて8年、人口は6万人から既に2倍の12万人を越えた。これは予想外のスピード。今度の組織改正は、町村合併後のままの体制から早く脱却して新しい市政をスタートさせたいとする青山市長はじめ関係者の願いが、先ず表面化したもの。だから、企画部はその期待を担って各町村の人々の心をつなぐことを、先ず心がけなくてははいけない。同時に、新市の今後のテーマを



企画課が初仕事でまとめた報告書

「集合住宅の町田市に及ぼす影響」

わかりやすく示すことが大事。具体的には企画部が中心になり日常の各事業を予算と人材配置面で総合調整すること。二つ目は急増が予測される規模の大きい公団・公社の集合住宅建設は、市財政に大幅な負担を強いるので、計画的にコントロールする特別な方策を考え、各部局とも連携して徹底した受容れ体制を整えること。三つ目は都市経営の近代化で、効率のよい市政運営を目指すことで、これは青山市政誕生以来の懸案事項である新庁舎建設事業と併せて、新しい町田市の姿を象徴し行政の近代化にふさわしい建物を構想すること。四番目は町田市の長期ビジョン(この中には、合併の条件となった各地域の課題解決策が盛り込まれたもの)づくりを始め、市民の目標となる都市像を描くこと』などであった。

私は、企画課に与えられた難しい課題に対面してみて、初めて事の重大性を認識し、仕事の中で身の引き締まるような体験を味わうこととなった。私の教師願望の志は、この頃を境にして次第に遠のいてゆくことになる。

■集合住宅の影響分析と「宅地造成事業協議基準」

企画課は、先ず、集合住宅建設への対応策の検討を始めた。と言っても一般的な課題としてではなく、差し迫った二つの団地対策が中心だった。いずれも主体は日本住宅公団で一つは鶴川団地の計画戸数 5290 戸、もう一つは山崎団地の計画戸数 8640 戸で、鶴川団地は昭和 42 年度から山崎団地は 43 年度から着工とされていた。

私たちは、二つの団地が造られることによって、①町田市の人口はどの位増えるのか、②交通問題がどのように発生するか③さまざまな行政需要がどうなり、市の財政はどんな影響を受けるのかなどについて、写真のような報告書にまとめた。昭和 42 年の 2 月だった。私は、町田市の名を全国に轟かせた「団地白書」より 3 年も前に自ら手がけたこの報告書を思い出し、市政情報室に現物を探してもらったが、市の中央図書館と両者に保管されていることがわかり感激した。その中の巻末の面白い記述の一部をご紹介します。

100 戸の集団住宅は、周辺地域社会に何をもちたらずか ?

- 350 人の人口増加をもちたらず。
- 小学生 20 人、中学生 4 人が増加する。6 年後に小学生 100 人、中学生 14 になる。
- 校舎増築に、小学校分 1,063,000 円、中学校分 160,000 円の市の経費負担が必要。
- 給水 1 日 98 t、汚水処理 1 日 98 t、ごみ処理 1 日 175 k g の必要が生じ、1 日当たり 9,760 kW の電力消費がなされる。
- 毎日、定期的な交通機関利用者が、81 人増加する。
- 毎月 2,200,000 円の食費の消費がなされ、周辺地域に総合食料品店 3 店の経営が可能。
- 毎月 700,000 円の銀行等の預金高が増加する。
- 市税収入年間、2,259,000 円が見込まれ、2,709,000 円の行政需要充足のための経常経費が必要となる。保育園の設置要望が出される。

続いて企画課は、具体的な各部門毎の施設整備や受け入れ条件の基準作りの取り組みを開始した。いわゆる町田市の「宅地造成事業協議基準」作りで、5 月に完成し正式に

公表した。私たちは当初、これを役所内部の「基準」ではなく、行政指導方針としての「要綱」にしたいと考えたが、国の宅地造成法などに抵触すると法制部局から指摘され、対外的には拘束力の弱い「基準」とすることで取敢えず涙を呑んだ。

■新庁舎建設への準備—三鷹市に学ぶ

「渋谷君、新庁舎のことを、そろそろ考えるようかな、、、？」坂本企画課長からそんな声がかかったのは、集合住宅対策の作業が一段落した昭和 42 年の初夏のころだった。

「課長は上から何か言われたな？」およその察しはついた。合併時の町田町当時のままの粗末な木造 2 階建ての現庁舎で、11 年間も延ばしてきた新庁舎の建設はもう指示が出されて当然だった。それに、青山市長は今限りという噂も広がっていたから、やるなら今をおいてほかにない、と誰もが考えていた。

よその庁舎はどうなっているのかな等と考えていると「三鷹市が面白そうだぞ」どこから聞いてきたのか課長が言い出した。調べてみると 2 年前の昭和 40 年に市民会館と併せて建設していたが、「タバコを吸わない市役所」とか「少数精鋭の動く市役所」などと呼ばれていて、確かに一見の価値はあると判断して二人で出かけて行った。

私は、そこでまた大変な出遭いを経験した。当時の三鷹市長・鈴木平三郎氏とその右腕と言われていた企画主幹の安田養次郎氏(鈴木市長の後の後継市長)のお二人だった。私たちは新庁舎の三階の市長室の隣にある応接室に招かれ、鈴木市長から 2 時間、その後、安田主幹からも 2 時間、三鷹市政のすべての基本となっている「少数精鋭」「タバコを吸わない市役所」の理念と実際を教えられ、同時に庁舎を造り変える考えの背景となっている市長の地方公務員像論をじっくり聞く機会に恵まれた。ご参考までにその主な内容をお伝えすることにしたい。以下は鈴木市長が語った言葉である。

『私は医者で専門は公衆衛生学の疫病だ。だから、市長になっても公共下水道の無い街は都市とは言えないが持論で、下水道をやりたくて市長になったと言っても過言ではない。その下水道普及 100%を完成する資金を捻出するために、私の市政の合理化も少数精鋭主義も生まれた。

新しい市庁舎は、すべての間仕切りを取り払い、市民が一目で執務状況を見渡せ、部長職も個室を持たず、タバコは各階にガラス張り喫煙室 1 室が備えてある。私が市長になってまず驚いたのは、どこを見てもものんびりでムダが多いことだった。人が多すぎる。そして働かない。定刻までに出勤するが、まずお茶を飲んでムダ話しをして昼になる。よく働く者はのけ者にされ、物品等の契約も法的手続きさえ万全ならば後はどうでもよい。何でのんびりしているのか理由も無い。不正は無いがムダだらけである。そして役人は先方に地位があると卑屈なほどペコペコする。一般市民には不遜である。苦情が来ると一応は頭を下げるが腹の中で笑っている。……』

以上は鈴木市長が引退後の昭和 50 年に頂いた自伝「挑戦 20 年—わが市政」の一部をご紹介した。読み返してみて直接伺った時の感動が蘇って再び強く胸を打たれたからである。もちろん、鈴木市長もそんな職員ばかりで決してないと断言する。しかし、三鷹市庁舎には、そんな役人を造らない工夫が随所に考えられていた。(次号に続く)

町田を歩き、考えて「日曜の会」は

30年を迎えました

日曜の会会員 大橋成夫

誕生からの10年・・・

昭和53年(1978年)5月28日(日)、7名の町田市在住の都市・建築の専門家が市内の喫茶店に集りました。これが、日曜の会の源泉である。(『まちだ風景』6号より)

時代は都市開発の兆しが出てきた頃で、専門家は環境破壊の先兵ではないかと市民団体から批判されだした時代であった。町田在住者でありながら仕事は都心で、町田は寝に帰るだけの地であった。専門家として、月に一度は、町田を考えようと最終日曜日の午後例会を始めたのであった。日曜日だけが唯一の全日市民の信条だから、肩のこらない下駄履きで集れる会、名前もそのまま「日曜の会」とした。

最初の2年間は町田を知らなければと、市の企画部長の講義を受けたり、55年3月、マイクロバスで大地沢、相原、小山田、小野路、野津田、鶴川と見学し、この中から活動のテーマが生まれた。「小野路の今後を考える」を市や小野路の方々に翌56年3月に提言した。この年、市は「町田市長期構想」の策定を進めていた。

大きなテーマもなかったことから、長期構想の議論やその後の実現など、自分のまちに関心を高めるようなメッセージを市民へ送れないかと議論して、フォーカス風の写真主体の会報を発刊することになった。とにかく市民みんなが、町田を好きになるような誌面づくりをしようと、誌名もやさしく『まちだ風景』とした。

60年初頭、日本建築学会関東支部都市計画委員会からの要望で、シンポジウムが計画された。6月に開催されたシンポジウムは盛会で、基調報告、女性市民を交えたパネルディスカッション、スライド上映等の盛沢山で評判は上々であった。このシンポジウムを契機として、当会に公民館運営審議会委員や青少年育成都市モニュメントのデザイン、自由民権森の“民権の碑”デザイン等の委嘱要請が続いた。これらは、例会で報告され担当者を募り、積極的に対応し、報酬の一部は会へ寄金するというユニークな決まりができた。

時代が要求するのか会員の専門分野も広がり、工業デザイナーやグラフィックデザイナーなどの職を持つ者や町田青年会議所との交流もでき入会者も増した。

1999年9月4日(日)

20周年記念シンポジウムを開催

日曜の会設立20周年記念事業として催されたシンポジウムは、雨にも関わらず約50名の参加者を得、「まちづくりと市民参加」をめぐるいろいろな意見があった。

小菅康夫氏(相模原市都市計画課)の相模原市の「都市計画マスタープラン」の策定プロセスを聞いた。市民と行政の対話に最も配慮がなされ、実現化に向けてのポイントを上げられた。1)情報の提供 2)市民と行政の協同(“協働”ではなかった) 3)ルールづくり 4)まちづくりコーディネーターの育成(今でも充分通用する)

この2年前ごろから、町田市でも「都市計画マスタープラン」の市民版づくりが始まり、会員数名が携わり重要な役割を担った。

(1999年3月町田市都市計画マスタープラン策定) この活動がきっかけとなり、「町田まちづくり市民会議」が誕生した。

その後の日曜の会は、住んでいる地域で活動したり、社会的要請の変化もあって活動が分散的な傾向を強めた。それでも町田の問題を探り、会報で特集を組んで発信してきたのである。例会は地味ながら毎月行われ、『まちだ風景』誌も毎号特集を組み、年1回の発行を続けていることが30年に繋がったのであろうと考えている。

このところ新加入の会員もあり、今後の活動に期待が持てる昨今である。

景観条例および景観計画策定に伴う

市民参加の経緯と市民のおもい

日曜の会会員 清瀬壮一

主な経緯

町田市景観条例の策定にあたっては、広く市民参加による検討・制定が以前から望まれていました。町田市ではそのような市民の要望に対して、2006年12月～2007年3月まで景観まちづくり市民講座が市内6ヶ所で開催され、景観法の理念などを中心に、参加した市民との意見交換が行われました。そして市は、2007年度より「景観市民調査会」（以下市民調査会）「景観懇談会」（以下懇談会）を開催し、市民の意見・要望に応えようとしてきました。

市民調査会は、広く市民に呼びかける形で募集し、町田市全域の景観意識の調査や、景観資産の掘り起こしなどを中心にまとめることを目的とし、2007年9月～2008年9月まで計8回開催され、相原・小山・忠生(2)、小山田・小野路、鶴川、玉川学園、原町田、成瀬・南町田の6地域・7グループで構成され、2007年度は、まち歩きなどを通じて、「まち歩きマップ」を作成し、守りたい景観・創出したい景観などさまざまな意見を整理し、グループ毎に検討し、2008年度は、景観をよりよいものにしていくために市民主役の持続的に取り組める景観づくりの活動などについて話し合い、同年11月まちづくりフォーラムで提案しました。

懇談会は2007年11月～2009年2月まで計8回開催され、有識者、地域事業団体を対象に組織され、景観市民調査会の動向に併せ主に景観条例・景観計画等の概要の策定を主とし、2009年3月「町田らしい景観形成の在り方に関する提言書」（以下提言書）として町田市に提出されています。また、2008年7月に市民意識調査を実施無作為抽出5000名に対して行い、市民の景観に対する考え方を調査し、2008年11月～12月には、「（仮称）町田市景観条例（案）の考え方」のパブリックコメントの募集を実施しています。懇談会における提言書はこれら市民調査会の提案・意識調査・パブリックコメントなどを参考としてまとめられています。懇談会と市民調査会との直接の意見交換は実現しませんでした。

今年度に入り、「建築物や屋外広告物の色彩を考えるワークショップ」（以下景観色彩ワークショップ）が2009年5月23日に開催されました。これは『広報まちだ』にて周知後、僅か1日で募集定員（30名）に達し、即日締め切ったほどの関心の高さでした。

今後の予定と課題

町田市は当初、2009年3月に上記経緯を踏まえ、景観条例を議会上程の予定でありましたが、上位機関との調整等もあり、おそらくこの『まちづくりの環』6月号が発行されるころ、議会に上程されると思われます。条例制定後は、引き続き（仮）町田市景観計画の策定の作業を行うことと聞き及びます。（景観色彩ワークショップはその一部のようなようです。）懇談会が提出した提言書についての勉強会が5月初旬に「日曜の会」有志で、玉川学園で行われました。提言書の構成は、1-基本的な考え方、2-景観づくり施策の構成の考え方、3-（仮称）町田市景観計画（素案）の概要、4-（仮称）町田市景観条例の考え方、の四つの構成および、そこに至る検討経過等が記されています。

市民が最も関心を持つ項目は、景観維持また景観形成のために、地域の意思をどのような形で条例・計画の中に反映し、市民が参加することのできる仕組みが具体的に記されているかにあると思います。提言書には、そういった仕組みの運用に関しては「町田市住みよい街づくり条例」との連携・活用を謳っていますが、その詳細は記述されていません。

また、町田市の景観づくりの理念として「生活風景」を基本的コンセプトとし、景観形成ゾーンを、1-丘陵地ゾーン、2-住まい共生ゾーン、3-にぎわいゾーンの三つのゾーンとし、景観誘導地区を1-小野路宿通り、2-町田市駅前通り、3-多摩境通りの三地区としたことです。

しかし、誘導地区においては、ある部分行政主導で景観形成が誘導されるものの、景観形成ゾーンにおいては、地域の主体性に委ねられており、その部分に関する行政の協力体制などは不明です。

特に、住まい共生ゾーンと町田市の住宅地（その中には近隣商業、準工業、工業などが含まれる）をひとくくりで定義したことには疑問が残ります。（懇談会・行政はある部分大まかなゾーン分けとし、地域住民に各地域の景観づくりを委ねたとも言えますが）町田市の住宅地は、団地、丘陵地、区画整理地などさまざまな地域特性を持っており、そういった部分の景観づくりの指針は記されていますが、どのような形で、市民が参加し、行政が支援するかが明確ではありません。



環境色彩ワークショップにて

まちづくり条例には、それに基づくまちづくり団体、まちづくり市民団体などがあり、そういった市民団体を活用するとありますが、現状は、行政がなすべきことの多くを市民に委ねており（アドバイザーの派遣と助言はあるが）、地域のまちづくりに関する意識の差もあり、全てが、順調に事が進んでいるようには見えて来ないのが現状です。また、条例および計画策定後の事業者に対する規制等の手続きなどの具体的な指針も、今後の課題と思われます。

そういった中で、行政は、とにかく景観条例の議会決定と、景観計画の早期実施に力を注いでいるように思えます。しかしながら、先日参加した景観色彩ワークショップにおいても、本来参加した市民が、対象地域において望ましい景観・望ましくない景観などの地域を選出し、その部分の環境色彩などの調査・分析を行うところを、おそらく行政のスケジュールなどもあり、予め行政が決めた地点（すでにサンプリング用の位置と写真まで用意されていた）で、我々は、色彩のサンプリングを行いました。そこには、私たちが望ましい環境色彩とはなにかということを考えるのではなく、単に調査のコマの一つでしかなかったのではないかと思わざるを得ないという印象を受けました。

景観条例および景観計画の実施に向けて急ぐことは必要と思います。しかし、かつて町田市都市計画マスタープラン（1999年施行）の3年におよぶ策定過程における市民的盛り上がりを知るものとして、今回の景観条例および景観計画の策定過程には、そのような手続きが不足であったのではないかと思います。

今年度はこの景観条例および景観計画の決定と併せ、現在、都市計画マスタープランの10年毎の見直し作業が始まり、2011年に改訂の公表および実施がなされると聞いています。しかし、この改訂作業には、現在のところ市民が積極的に参画する機会はないようです。

景観条例・景観計画および都市計画マスタープランは、市民がまちづくりに関わる時、必ず規範とするものであるため、行政が丁寧に時間と人材を費やし、市民が参画する仕組みをつくるのが急がれると思います。

そのためには、町田市内のまちづくり等に関心のある市民活動団体が結集し、行政・議会等担当部署に働き掛けることが必要と思いますがいかがでしょうか？

事務局だより

定例会のおしらせ

- ・6月の定例会は6月3日(水曜日)です。
中央公民館 学習室(3) 18:00～
- ・7月の定例会は7月1日(水曜日)です。
中央公民館 学習室(3) 18:00～

若い人を面白がらせるまちづくりの発信を

向谷 有加

2009年5月23日付朝日新聞の夕刊の一面に「シブヤ大学 全国に『後輩』」という記事を見つけました。東京都渋谷の街全体をキャンパスに見立て、著名な文化人から「その道の通」の市井のひとまでが講師となるこの「大学」。HPを通じて申し込むことで誰でも自由に受講できる新しいスタイルが好評で、全国にシブヤ大学を踏襲した「姉妹校」が広がりつつあるようです。学長は左京泰明さんという30歳の男性。記事によるとソーシャル・ビジネスに興味を持っていた左京さんが渋谷区の市民大学構想にかかわることでシブヤ大学が始まったそうで、2006年の開校以来、学生数は1万1千人を超えています。参加者の年代は20代から30代が7割を占め、会社員が6割を占めています。「ユニークな授業が無料で受けられる」という点が特に若い世代に好評のようです。

地域の魅力を発信する試みは、町田市でも様々に行われています。シブヤ大学が打ち出している、従来の中老年中心の市民大学のイメージとは異なるスタイルをみても、いかに若い人を面白がらせて巻き込んでいくかがこれからのまちづくりのカギになるのではと感じました。おりしもこの不況、幸か不幸かすべての若い人が就業しているわけではありません。「お金をかけずに」、「楽しいこと」を探し求めている若いひとがいるのを筆者は感じます。そんな若い人たちを巻き込むようなまちづくりが発信できれば、町田市でもまた新しい魅力が生まれることでしょう。ご興味ある方はぜひシブヤ大学HPをご覧ください。(http://www.shibuya-univ.net/)

編集後記

今号では5月17日におこなわれました日曜の会の30周年記念講演・シンポジウム関連の記事を中心にお届けしました。ご好評いただいています渋谷事務局長の「ふるさとづくり50年・私の幻燈譜」も、連載ますます快調です。



『まちづくりの環』2007年1月号にて岩上副議長が触れていますように、日曜の会は当市民会議が設立されるきっかけとなった「町田市都市計画マスタープラン」策定の際に、その中心を担った市民団体のひとつであり、当市民会議とはとても縁の深い間柄にあります。



なお、日曜の会の講演・シンポの会場となりました可喜庵では、日曜の会の機関誌『まちだ風景』毎号の表表紙を飾ってきた松永七郎氏によるスケッチと横山敬子氏による版画の原画展も5月15日から19日のあいだ展示されました(H.I.)。

まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報
2009年6月1日第70号発行
発行者 佐藤東洋士
編集責任者 井上弘貴
事務局 常盤町桜美林大学内
TEL 042-797-6947